

編集後記

▼「LD、AD/HDD問題」を取り上げました。今年は国連の「アジア、太平洋障害者の一〇年」の最後の年です。またこれらの子どもが抱える教育課題の取組みは学校教育の緊急課題のひとつです。七月一日の「いなほの会」主催の講演会の成功（六七頁参照）はそのことを物語っています。講演が活字になり通常学級での活動展開の基本的な理解・知識として役立つといいな—と思いました。

▼窪島教授、新田・稲月両医師の専門的なお話は経験主義、固定観念に陥りがちな教師・親の実践への道案内のように読みました。「登校拒否する子どもは怠けることのできないガンバリ屋、その子どもたちの変化は一年単位（窪島）」「LDは個性を尊重する生き方や教育のモデルでもある。まず求められるのは子どもの状態の理解と環境調整」（新田）「多動児のエネルギ源は『注目』」、問題行動はその子のメッセージ、長い目で相談できる人を見つくる、天才がおちこぼれる今の学校体制（稲月）等の指摘に注目です。▼行政は親の会の動き、願いをくみ上げつつ全体的な教育的対応を始めています。各地の

市民参加型の体制構築が期待されます。

▼イギリスの環境教育の研究に詳しい安藤氏の「日常的に自然と関わる」活動があつての自然教育という視点また新潟県の環境学習や環境教育実践を掘り起こそうという提起を真摯に受け止めなくてはと思います。

▼小林論文はこれまで国内の原発関連事故とそれへの対応の問題点、それ故の日本の原子力行政への世界からの厳しい批判、世界各国がプルサーマル計画から撤退した理由等々を伝え、これらの事柄を学習し、住民の良識を世論に育て上げた「小さな村の大きな審判」を高く評価しています。

▼森田論文は「タンポポ戦争は、自然の豊かさ」を教えてくれるバロメーターだ—とっています。先の安藤論文の提起にもかかわつてこの夏、子どもたちの目をそこにむけさせる取り組みがでてこないかと思いました。

▼高校生の鈴木さんは「公教育を通して全ての人が環境問題の知識と地球環境への危機感を共有すべきた」という思いを持っています。しかし、彼が受けてきた中学までの環境教育は科目・時間数の少なさ、教科書の記述内容の曖昧さ等のため全てで面でキチンとした認識を育てていないといっています。彼が自ら学んだことを添えて、教師の、大人の応答をまっています。

▼「米百俵のほんとうの意味」を長岡市民は小泉首相同様よく分かっていません。高校生が米俵をリレーマラソンしたことなどワイドショー的マスコミ報道にもがっかりです。

▼神戸から移り住んで六年目の東郷さん。新潟の自然を見つめる目が新鮮です。「山のストレスに目を向ける」ハッとしました。

▼新潟県では全市町村で「新しい歴史教科書をつくる会」主導の中学歴史・公民教科書が不採用になりました。さらに世論が広がることを願っています。
(本田)

にいがたの教育情報 No.66

2001年7月15日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。